NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ－200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　7

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15406332

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, アバン, レイラ, ロカ, ヒュンマ, 子ヒュン, 子マァム

ネイル村でのひと時。
マァム３歳、ヒュンケル８歳。激甘につき、要注意。他ＣＰ推奨の方は飛ばした方がよいかも。
2021.6.12　ヒュンマオンリー合わせ。

2022.1.25　カヅキ様 user/1688436より、ちびたちの素敵イラスト頂戴いたしました！！かわいいです♪カヅキ様、ありがとうございました！！
最終ページに掲載しております。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　7

第７章　再会
　アバンとヒュンケル、それにバケルは、最後の村から約５日間をかけて徒歩で移動し、ようやく、目指す村へとたどり着いた。もっとも、バケルはふわふわと漂いながらであったが。
　うっそうと生い茂った森の中、細い道が先へ先へと伸びていく。
　それをたどっていくうちに、ぽっかりと、視界が開けた。
　森が終わり、その先に平地が見えた。
　平らな台地の奥に、いくつもの屋根や煙突が見え始めた。
　煙突からは煙が立ち上り、遠くから薪割りの音が聞こえる。濃い森の空気は消え、人の生活の気配が漂っていた。
　ヒュンケルは、きょろきょろと周囲を見回し、アバンに尋ねた。
「ここが、ネイル村、ですか？」
「ええ。」
　アバンは、慣れた足取りで村への道を歩き続けた。
　そして、柱の打たれた村の入り口をくぐると、案内もなく、村の中へと足を進めた。
　アバンは、迷うことなく村の広場を通り抜け、しばらく歩くと、一軒の戸建ての前で足を止めた。
「こんにちはー。」
　アバンは、玄関ドアをノックしながら、声をかけた。だが、返事はない。
　アバンが首をかしげると、少しして、家の中から若い女性の声が聞こえた。
「すみませーん。今、手が離せなくて。裏に回っていただけますかー？」
「わかりましたー。」
　アバンは、家の中に向かって声を張り上げた。
　そして、傍らのヒュンケルとバケルに声をかけた。
「裏庭に回りましょうか。」
　ヒュンケルは、アバンの背中を追って、この家の裏庭に向かっ

た。
　足を進めていくと、建物の向こうから、何かふわふわと宙に漂うものを見つけた。
　いくつもの丸く、すきとおった球が、明るい陽の光を受けて、小さな虹色のスペクトラムを作っている。宙に漂うそれは、夢の中のようにふわふわと実感がなく、やがてぱちんと消えて行った。
　前を歩くアバンが、柵の隙間から、裏庭らしい敷地に入った。ヒュンケルも後に続く。
　すると、そこには緑のじゅうたんが広がっており、明るい日差しの下、あのふわふわした透き通る球がいくつもいくつも宙に浮かび、風に運ばれて行こうとしていた。
　そのきらめく虹色のスペクトラムの光の下に、ふわりと薄桃色の髪が舞った。
　やわらかそうな、その髪が風に吹かれる。
　そして、髪の主は振り返り、薄桃色が宙を舞った向こうに、幼い少女の面が見えた。
—・・・妖精？・・・いや、天使・・・？
　あどけない桃色の髪の少女を見て、ヒュンケルは漠然とそんな言葉を胸に浮かべた。
　その子の周りには、あの虹色に光る透き通った球がいくつも漂っており、やがて、ぱちんと消えて行った。
　少女は、夢からさめたような、不思議そうな顔をして、ヒュンケルを見ていた。
「こんにちはー。」
　アバンの明るい声で、ヒュンケルは現実に引き戻された。
「よう、アバン。」
　見ると、少女の隣に大柄な男が座っていた。
　裏庭には、木製の大きなテーブルが置かれていて、その周囲には、いくつかの椅子も置かれていた。椅子は、きちんと脚と座面が作られているものもあったが、太い丸太を切っただけのものも複数あった。大柄な男は、テーブルの前に置いた4本脚の椅子に座り、片肘を背後のテーブルに乗せていた。一方で、その男の隣で、少女は、丸木の椅子の上にちょこんと腰かけていた。

アバンは、庭に入ると、背負っていた大きなリュックサックを地面に下した。数日の野営に耐えられるだけの旅支度が整えられた装備は重かった。アバンは、リュックサックを下ろすと、やれやれというように軽く気を吐いた。ヒュンケルも、アバンにならって、背負っていたナップザックを地面に下した。
　アバンは、身軽になると、にこにこした顔で、少女と男に話しかけた。
「シャボン玉ですか。いいですねー。」
　すると、大柄な男は、陽気にアバンに応えた。
「ああ、お前たちが来るっていうから、レイラがオーブンで鴨を焼いてんだよ。で、危ないから、俺が外でマァム見てろって言われてさ。」
「そうですか。お父さんも大変ですね、ロカ。」
　アバンは、しゃがんで少女に目線を合わせると、彼女に声をかけた。
「久しぶりですね、マァム。
・・・って、覚えていませんよね。」
　ロカが苦笑した。
「そりゃあ無理だろアバン。あのときはまだ、マァムは１歳になってなかったんだ。」
「マァム、いくつになりましたか？」
　マァムと呼ばれた少女は、アバンに指を３本立てて見せた。
「そうですか、３歳ですか。」
「なったばっかりなんだよ。」
　目の前の会話に入れず、ヒュンケルはその場に立ち尽くしていた。
　すると、幼いマァムが彼に目を止め、じっと見つめた。
　その視線に気づき、アバンがヒュンケルを振り返った。
「ああ、すいませんね、ヒュンケル。
　紹介しますね。この人は、ロカ。私の古い友達です。それと、この子はマァム。かわいいでしょう？」
　ロカは、複雑そうな顔でヒュンケルを見ると、彼に声をかけた。
「よう、坊主。

・・・でかくなったな。」
「え？」
　ヒュンケルは、ロカの言葉に違和感を覚えた。旅路のどこかで会っただろうか。だが、記憶を探ってみても、ヒュンケルには、目の前の男に見覚えはなかった。もちろん、その隣の少女にも。
　ヒュンケルが戸惑っていると、この家の勝手口が開き、建物の中から若い女性が姿を現した。
「いらっしゃい、アバン様。ヒュンケル。
あら・・・？そのかわいいお友達は誰かしら？」
「レイラ。お邪魔しています。」
　レイラは、ヒュンケルの肩のあたりで宙に浮いていたバケルに目を止めていた。
　アバンが、軽くバケルを彼らに紹介した。
「この子はバケル。ゴーストです。去年から一緒にいるんですよ。」
「・・・お前って、何でも仲間にするな・・・。」
　ロカが苦笑した。
　マァムは、ふわふわと漂うオバケモンスターが気になったのか、バケルを指さして、声を出した。
「バケル。」
　アバンはしゃがんだまま、マァムに目線を合わせて彼女に話しかけた。
「おや、お話上手ですね。
　私は、アバン。先生、でもいいですよ。」
「アバ・・・しぇんしぇー。」
　マァムが舌足らずな口調で答えた。
「そうです。お上手です。それとね、あっちの男の子がヒュンケルです。言えますか？」
「しゅんける？」
　マァムが口を開いたが、うまく発音できない様子だった。
「違いますよ。ヒュ・ン・ケ・ル、です。」
「すん・・・。」
　アバンは、マァムにもわかるように、ゆっくりはっきり、ヒュン

ケルの名を発音したが、３歳の少女には、彼の名の発音は困難のようであった。
「うーん、ちょっと難しいですかねえ。」
　アバンが困っていると、レイラが、愛娘に声をかけた。
「じゃあね、マァム、にいに、って言える？」
　すると、マァムは、嬉しそうに答えた。
「にいに。」
　今度ははっきりと発音できている。
　アバンも、笑みを浮かべた。
「あ、いいですね、レイラ。」
　レイラは、改めてヒュンケルをマァムに示した。
「マァム、にいに、よ。ご挨拶してらっしゃい。」
　すると、マァムはヒュンケルに駆け寄った。
　幼女のまだ柔らかい桃色の髪が、ふわりと風に舞った。マァムは、満面の笑みでヒュンケルに駆け寄った。
「にいに！」
　ヒュンケルは、どう返していいのかわからなくなり、アバンに助けを求めた。
「せ、先生？」
　だが、アバンは、穏やかに微笑んだままだった。
「いいんじゃないですか。あなたの方がお兄ちゃんなのは事実なんですし。」
　戸惑ったまま、ヒュンケルが固まっていると、レイラが彼らに声をかけた。
「長旅でお疲れでしょう。中にどうぞ。お茶を入れますよ。バケルもどうぞ。」
「荷物はどうしましょうか。」
「そこに置いておけよ。」
　大人たちが言葉を交わしながら、家の中に入ってゆく。
　すると、マァムがヒュンケルの右手を握った。そうして、彼を家の中に引っ張ろうとしている。
　柔らかく、それでいて力強い、小さな手だった。

その日は、早々に子どもたちとゴーストのモンスターを寝かしつけて、大人たちはロカの家のダイニングで旧交を温めていた。
テーブルの上には、レイラが焼いてくれた鴨の残りがあり、付け合わせに白カビのチーズとニシンの酢漬けが皿に盛られていた。
じゃがいもをつぶして焼いた、お焼きもあった。
ロカは、アバンとともにビールを傾けながら、鴨のローストを口に運んでいた。
ロカがアバンにビールを注ぎながら、話しかけた。
「アバン、お前、手紙、うちの玄関にさしてっただろ。」
ロカの不自然な言葉の内容に対し、アバンはこともなげにうなずいた。
「ええ。読んでくれましたか。」
ロカは、アバンの破天荒なところには慣れていたが、この手紙のことはさすがに呆れていた。ロカは、ため息交じりに言葉をつづけた。
「読んだから、今日、お前らが来ることが分かったんだ。
・・・お前、ルーラで来て、手紙だけ置いて行ったな？」
アバンは、あっさりとうなずいた。
「はい。ルーラ屋に頼んだら、通常料金に加えて、ロモス王都からの別送代もかかるじゃないですか。けっこう馬鹿にならないんですよ。」
「・・・で、手紙だけルーラで置きに来て、お前はあの坊主と歩いてきたのか？」
「はい。」
ロカは、いよいよ、その精悍な面に複雑そうな色を宿し、呆れた声を出した。
「なんでまた。」
「だって、ヒュンケルの前でルーラ使うわけにはいきませんからね。」
すると、アバンの意図を察したレイラが口をはさんだ。
「あら、アバン様、ヒュンケルは、魔法はダメなんですか？」
アバンは、レイラの言葉に我が意を得たりとばかりに、膝をたたいた。

「そうなんですよ！
　私もね、あの子、結構賢いから、契約だけはできるんじゃないかと思って、いろいろと挑戦してみたんですよ。でも、全くダメでした。
　なんと、メラもホイミもバギも契約できなかったんですよ！魔法陣が一切反応しなかったんです。こんなの、見たことなかったんで、私もびっくりしました。」
　アバンの熱弁に、同じく魔法を一切使えない、戦士のロカがアバンを横目でにらんだ。
「・・・それは、俺に対する嫌味か？」
　アバンは、ロカにとりなした。
「いえいえ、ロカは、まあ、わかるじゃないですか。いかにも戦士っぽいですし。
　でもヒュンケルはもっと線も細いですし、賢い子ですから、いけると思ったんですけどねえ・・・。」
　聞きようによっては、やはり、ロカに対する嫌味が入っているような気もしたが、アバンに他意がないことがわかっているロカは反論しなかった。
　アバンはつづけた。
「ヒュンケルが魔法を使えないことが分かったから、ここにもルーラでは来なかったんですよ。」
　アバンは、ヒュンケルが魔法を一切契約できないことに気づいてからは、ヒュンケルの前では魔法はほとんど使っていなかった。魔法を前提にした行動を覚えさせるべきではないと思ったからだ。だから、ルーラを使えば一瞬で移動できることも実感させたくなかったため、常に徒歩で移動していた。アバンがはっきりとヒュンケルの前で魔法を使ったのは、バケルを治療した時くらいだ。さすがにアンデッドモンスターに、一般の人間に対する治療は使えなかった。
　もちろん、魔法が使えなくても、道具で補うことができるが、なにしろ、金がかかる。それはおいおい覚えていけばいいことだとアバンは考えていた。
　ロカは、以前カールの王都で、ヒュンケルを指導した時のことを

思い出していた。
「あいつは、戦士向きだよ。前にも俺が言っただろう。」
　アバンは、ロカの言葉にうなずいた。
「ええ、大地斬と海波斬までは覚えてくれました。空裂斬はまだちょっと無理っぽいですけどね・・・。あと、闘気技の訓練はしてくれなくて。まぁ、闘気技は、殺気が強いと危ないですから、もうちょっと感情のコントロールができるようになってからの方が安全ですけどね。」
「待て、もうそこまで覚えさせたのか？あいつは、いまは何歳だっけ？」
「８歳になりましたよ。」
「・・・おっそろしいガキだな。大丈夫なのか、アバン。」
「何がです？」
「あの坊主に寝首をかかれないようにしろと、俺は言ったはずだが。なのになんで、技まで授けてんだよ。」
「だって、私は、あの子の先生ですから。」
　アバンは、しれっと答えた。
　レイラは、アバンの話を聞きながら、先ほどまでここに座っていたヒュンケルの様子を思い出していた。
「でも、アバン様、ヒュンケル、少し落ち着きましたね。穏やかになっていますよ。」
　アバンは身を乗り出した。
「でしょ？でしょ？
　この前の村では、村の子と一緒に遊んでましたからね。バケルともよく遊んでいますよ。からかわれてるって感じではありますがね。」
　その言葉に、レイラは、くすりと笑った。
　アバンは言葉をつづけた。
「ヒュンケルは、私にはつっけんどんですが、ほかの人には礼儀正しく接していますし、同世代の子どもたちとも遊べるようになってきています。
　いろいろな町や村で農作業とか、お仕事もさせてたんで、この世界の常識とか、技術とか、身につけてきているんですよね。」

ロカは、ふと、気になっていたことをアバンに尋ねた。
「あいつ、カールでのことは覚えてないのか？俺を見て、不思議そうな顔をしてたし、アバン、お前、改めて俺たちのこと、紹介しただろ。」
「ええ・・・。」
　アバンは、一瞬、言い澱んだ。
　その表情が陰りを帯び、アバンは、ぽつりぽつりと言葉を紡いだ。
「ヒュンケルは、あの日のことは全く覚えていません。それに、カールでロカたちと過ごしたこともほとんど。
　傷痕は背中なんで、自分では見えないからまだいいんですけどね・・・。」
　そう言って、アバンは寂しそうに笑った。
　カールでの日々も、あの事件を除けば安らいだものであったはずだったのに、今はその痕跡すらもヒュンケルの中には残っていなかった。
「やっぱり、あの痕、残ったのか・・・。」
　ロカがつぶやくと、アバンは黙ってうなずいた。
　レイラは首を振った。
「覚えてないならその方がいいわ。それだけ怖かったんでしょうから。」
　カール王都で襲撃を受けたときのことは、レイラが一番よく覚えている。あの夜、生死の境をさまよったヒュンケルの姿は、レイラの目に焼き付いていた。もう、あんな思いはさせたくなかった。
　アバンはうなずいた。
「だから、私も、あの日のことも、カールでのこともヒュンケルには話していません。そこのところはご協力お願いします。」
「ええ、もちろん。」
　アバンの言葉に、レイラもうなずいた。
「しばらくお邪魔させていただいていいですかね。私も、ロカと話したいですし、ヒュンケルもマァムと遊ばせたいので。」
　アバンの依頼に、レイラはうれしそうに微笑んだ。レイラは、隣のロカを仰ぎ見た。

「ゆっくりしていってくださるなら、私たちは大歓迎です。ねえ、ロカ。」
「あ、ああ・・・。」
　ロカは、ヒュンケルの手を握って嬉しそうに引っ張っていた愛娘の姿を思い出し、なんとなく面白くない気分ではあったが、このときは、大人の対応をした。

　その次の日、アバンは、ネイル村の広場に、村の子どもたちを集めていた。
　子どもたちは、アバンを囲んで丸く座り、しげしげと、この眼鏡をかけた、くるくる頭の奇妙な男の姿を眺めていた。
「皆さん、こんにちは。
　長老様から頼まれまして、今日からしばらくの間、私が皆さんに、読み書きと計算、それに、剣技と魔法を教えます。
　それなので、私のことは、『先生』って呼んでくださいね。」
　子どもたちは、口々に「はーい。」と答えた。
　そのアバンの頭の上を、バケルが宙返りしながら飛んだ。
「センセイー、センセイー。」
　すると、子どもの一人が手を上げた。
「先生。それ、モンスターですよね？危なくないんですか？」
　アバンはにこりと笑って、聞き返した。
「グッドです。いい質問ですね。
　どうしてそう思いますか？」
　子どもは、困ったように、消え入りそうな語尾で答えた。
「だって、お父さんもお母さんもそう言ってるから・・・。」
　アバンは、大げさにうなずいた。
「うんうん。お父さんやお母さんの言うことは、間違っていませんよ。その通りです。森の中でモンスターや野生動物にあったら危ないですからね。すぐに逃げてくださいね。
　でも、こんなモンスターもいるんですよ。」
　そう言って、アバンは、バケルを肩に止まらせた。
「まずは、この子を見てみましょうか。私たちは、もう１年の間、一緒に旅をしています。この子はいたずら好きですが、少なくと

も、皆さんを危ない目に遭わせないことだけは約束します。こういう子もいるんだって知っておいてもらえれば、それで十分です。」
　そう言って、あたりをぐるりと見渡して、アバンは言葉をつづけた。
「皆さんが大人になったとき、この世界の状況がどうなっているのかはわかりません。でも、大人になったときには、自分の目で見て、自分の頭で考えていくことが必要です。
　例えば、モンスターは、どういう存在なのか。
　この村を囲む森に棲むのは、どんな生き物なのか。
　誰かに言われたから、だけではなくて、いろいろな経験を積んで、自分で考えられるようにしていってくださいね。」
　そして、アバンはバケルにも声をかけた。
「バケル、あなたも一緒にお勉強しましょう。」
　アバンがそう言うと、バケルはアバンの肩から飛び立ち、アバンの前にちょこんと座った。
　子どもたちには、アバンの言葉の意味は、ほとんどわからなかった。
　アバンも、通じているとは思っていなかった。
　ただ、とりあえず、このオレンジ色のゴーストは、アバンの言うことを聞き、彼の前にちょこんと座って楽しそうにしている。アバンもそれを当然のようにふるまっている。
　このヘンなモンスターは仲間に加えてよさそうだ。
　なんとなく、子どもたちはバケルに対する警戒心を解き始めていた。
　ヒュンケルは、子どもたちの輪から少し離れて、マァムと並んで地面に座っていた。
　ヒュンケルは、読み書き、計算とも問題はなく、剣技は海破斬まで習得済み、さらに魔法は使えないので、アバンが子どもたちに教える内容については、ほとんど習う必要のないことだった。
　一方、まだ３歳のマァムには、いずれの内容も早すぎた。
　そのため、とりあえず、マァムにアバンの教える内容を聞かせるだけは聞かせて、あとは一人でどこかに行ってしまわないようにヒュンケルがマァムを見ている、ということになっていた。

マァムは、小枝を手にすると、それで地面をがりがりと引っかき、丸を描いたり、線を引いたりしていたが、まだ絵にも文字にもなっていなかった。その上、小枝をこぶしで握りしめているのだから、必要以上に力が入っていた。
　ヒュンケルは、マァムの手を取ると、小枝を握りなおさせた。
「マァム、こうやって持つんだよ。」
　そう言って、ヒュンケルは、彼女の手の上から小枝を握り、彼女の手を取りながら、地面の上に、「マァム」と綴った。
「ほら、これで、マァムって。」
　マァムは、幼子特有の黒目の大きな目でヒュンケルを見上げ、感嘆の声を上げた。
「にいに、しゅごーい。」
　ヒュンケルは、困ったようにつぶやいた。
「・・・別に、このくらい誰でも書けるし、お前もすぐに書けるようになるよ。」
　マァムは満面の笑みのまま、大きくうなずいた。
「うん！」
　いままでアバンとの旅路で、村の子どもたちと言葉を交わしたことはたびたびあった。また、この前の村では、そこの少年たちと一緒に遊びもした。
　しかし、こんなに小さな、自分よりも幼い子どもに頼られたことはなかった。
　マァムの相手をするのは面倒だと思う一方、マァムの向けてくれる笑顔が温かくて、もっと見てみたいと、ヒュンケルは思い始めていた。

　またある日、ヒュンケルとマァム、それにバケルは、レイラに連れられて、村の近くの森に出かけていた。
　レイラは、３人を連れて森の小道を進んでいき、目指す木を見つけると、彼らに見せた。
「あった。
　３人とも、いらっしゃい。」
そう言って、レイラが指さした先には、うっそうと葉を茂らせた灌

木があり、真っ黒な小さな粒が集まった松ぼっくりのような実が、いくつも枝になっていた。
「ブラックベリーよ。この時期によくなるのよ。ジャムやジュースにするとおいしいのよ。お酒にもなるわ。摘むの、手伝ってくれる？」
　すると、マァムが勢いよく手を上げた。
「はーい。マァム、これ、いちばんしゅきー。」
　愛娘の言葉に、レイラは笑みをこぼした。
「マァムは何でも一番ね。」
　いち早く、バケルが宙を舞い、自分のとんがり帽子を取って、その中に、次々とブラックベリーを入れて行った。
　それを持って、レイラの前にひゅーっと舞い降りる。
「あら、ありがとう、バケル。」
　マァムも負けじと、黒く光る木の実を取ろうと手を伸ばした。
　だが、いくら灌木とはいえ、マァムの背の高さでは実に届かないところが多く、また、力任せに実を引っ張るものだから、低いところにあったブラックベリーも握りつぶしてしまっていた。
「マァム、俺がとるから、お前はかごを持っててくれ。」
「えー。マァムもやるー。」
　ヒュンケルの言葉に憮然としたマァムに、彼は、仕方がないなと思いなおし、マァムを抱えて胸の高さまで持ち上げた。さすがに、いくら３歳のマァムとはいえ、８歳のヒュンケルでは持ち上げるのに骨が折れたが、そこはやせ我慢だ。
「ほら、これで手が届くだろう。」
「わー。にぃに、ありがとー。」
「握りつぶすなよ。そっと取れよ。」
「うん！」
　そうして、ようやくマァムはブラックベリーを１粒、木から摘み取った。たった１粒だが、自分で摘み取ったのが嬉しいのだろう。マァムは手の中のブラックベリーを眺めてにこにこと笑みを浮かべていた。
「あら、マァム、上手にできたわね。よかったわね。」
「うん！」

母にも褒められて、マァムはうれしそうに微笑んだ。
　つられて、ヒュンケルの面にも笑みが上る。
　ふと、そのままの表情で、レイラと目が合った。
　ヒュンケルは、急に気恥ずかしくなって、慌ててレイラから目を逸らした。
　その子どもらしい反応に、レイラが微笑んだ。
「さ、もう少し摘みましょうか。」
　レイラに促され、ヒュンケルは、恥ずかしさで頬を紅潮させたまま頷いた。
　やがて、レイラのかごが、ブラックベリーでいっぱいになった。
「これくらいでいいかしらね。」
　ふと、ヒュンケルは、あたりを見回し、メンバーが足りないことに気が付いた。
「あれ？バケルは？」
　いつの間にか、オレンジ色のゴーストの姿が見えなくなっていた。
　ヒュンケルは、大声で呼びかけた。
「バケル—！帰るぞー！！」
　すると、近くの小高い木の上から、バケルがひゅーっと降りてきた。その手には、いくつもの黒い粒々の付いた木の実を持っていた。
　ヒュンケルは、バケルに尋ねた。
「あれ？あんな高いところにもブラックベリー、あったのか？」
　レイラはバケルの手の中を見て、得心したように声を上げた。
「ああ、これは桑の実よ。」
「桑の実？」
　ヒュンケルの問いかけに、レイラは答えた。
「そうよ。ブラックベリーと似ているけどね。これも食べるとおいしいわよ。確かに、この木、桑の木ね。木が大きくなっちゃうと、取りにくいのよね。」
　レイラは、バケルがおりてきた木の幹に手を添えた。１５フィートはあろうかという高さに育った木は、幹も太くがっしりとしていた。

すると、マァムが、レイラを見上げて尋ねた。
「かーたん。おいしい？」
　桑の実がおいしいかという意味だろう。レイラはすぐにうなずいた。
「ええ、おいしいわよ。」
　それを見て、ヒュンケルがマァムに尋ねた。
「なんだ、マァム、欲しいのか？」
　マァムは何と答えたらいいのかわからない様子で、困った目でヒュンケルを見上げた。
　ヒュンケルはマァムに答えた。
「いいよ、俺、登って、取ってくるよ。
　バケル、来いよ。」
　そう言って、彼は、軽い身のこなしで、あっという間に、大きく育った桑の木に登って行った。バケルはそんなヒュンケルを追いかけて、ふわりと空に飛んで行った。
　ヒュンケルが桑の木を登っていくと、下からマァムの声が聞こえた。
「にいに、しゅごーい！」
　そう言って、両手で手を振っているのが、なんともかわいらしい。ヒュンケルは、我知らず、顔をほころばせていた。
　すると、ヒュンケルに追い付いてきたバケルに冷やかされた。
「カオ、アカイ。」
「なんだよ。」
　ヒュンケルは、慌てて表情を固くした。
　よく見ると、桑の木は、その枝先に、たわわに黒く光った実を下げていた。
　ヒュンケルは、それを一つずつ手に取って摘み、バケルが逆さにした帽子の中に入れていった。
　ふと、生き物の気配に気付き、ヒュンケルは手を止めた。
　見ると、小さな鳥が、せっせと桑の実をつついていた。太くて短いくちばしに、丸い腹、端の黄色い翼は、ヒワだろう。
　空からは初夏の日差しが降り注ぐが、木の葉がその強さをやわらげ、心地よい風が吹き抜ける。

がさがさと音がした方向を見ると、茂った森の葉の間から、青に縁どられた白い翼が飛び立った。キメラだ。
　より奥の木の根元には、おばけキノコの赤い笠と、いっかくうさぎの金のつのが見える。
　森の恵みとそれに育まれるいきものたち。
　森が呼吸をしている。
　野生動物だけではなく、モンスターたちも、等しく森に包まれている。
　なんとなく、そんな言葉が頭に浮かんだ。
　小鳥たちの分を残して、バケルの帽子に一通り、桑の実を入れ終えると、ヒュンケルは来たときと同じように、軽い身のこなしで地上に降りた。
　バケルも帽子を逆さに持ったまま、ふわりと降りてきた。
「トッター。」
　バケルは、自慢げに、マァムの前で帽子を見せた。中には、いくつもの桑の実が入っていた。
「しゅごーい！」
　マァムは、目をきらきらさせて帽子の中を見つめていた。
「にいに、バケル、ありがとー。」
　そう言って、嬉しそうにマァムは笑った。

　村への帰途の中、レイラは、小川に寄り道をした。
　川幅も狭い、浅い小川がさらに蛇行して、小さな浅瀬を作っていた。深さもマァムの膝くらいまでしかない。
　レイラが、汗もかいたし、寄っていきましょうかと子どもたちに言うと、特にマァムが歓声を上げた。
　早速、マァムは靴を脱いで、ワンピースの裾を豪快に持ち上げた。浅瀬で水を蹴り上げ、水しぶきを上げている。バケルも川に向かっていき、手で水をすくってマァムにかけた。
「きゃあ、バケルっ、ちゅめたーい。」
　その様子に、ヒュンケルが驚いて声を上げた。
「ちょっと待て、マァム。そんなに裾上げちゃダメだろ！」
　子どもらしくない物言いに、レイラが苦笑した。

「どうしたの、ヒュンケル？」
　ヒュンケルは、レイラからもマァムからも視線を逸らして、頬をほんのりと染めたまま、つぶやいた。
「だって、子どもでも、女性の肌は見ちゃいけないって父さんが・・・。」
「父さん？」
　レイラに聞き返されて、ヒュンケルは我に返った。とたんに表情を硬くする。
　忘れていた。
　この人も、先生の、勇者の友達なんだ。
　父さんのことを知られるわけにはいかない。
　どうごまかそうかとヒュンケルが思考を巡らせていると、レイラは、何も言わずにマァムに呼びかけた。
「マァムー、上がってらっしゃい。」
「はーい。」
　マァムは、元気に返事をしたが、そのはずみにバランスを崩し、浅瀬の中に尻もちをついた。ひときわ大きな水しぶきが上がった。
「マァム！」
　ヒュンケルが駆け寄ると、マァムは、夏用のサンドベージュカラーのワンピースを胸元まで濡らして、川の中に両手をついて座り込んでいた。びっくりした顔をしている。
「あーあ。びしょびしょだな。」
　ヒュンケルは、手を差し出して、マァムの身体を浅瀬から引っ張り上げた。
　レイラは、手ぬぐいを取り出すと、マァムの顔や髪を拭いてやった。
　初夏とはいえ、水を含んだワンピースは重そうで、冷たそうだった。
　ヒュンケルは少し考えると、自分の着ていたシャツを脱いで、マァムの前に出した。
「ほら、俺の着とけよ。」
　マァムの代わりにレイラが答えた。
「いいの？」

これを脱いだら、ヒュンケルは、上半身は裸だ。
「大丈夫です。今日は寒くないし、俺は男だし。俺のじゃ、ぶかぶかだとは思いますが。」
　レイラは、ヒュンケルからシャツを受け取ると、礼を言った。
「ありがとう、ヒュンケル。」
　そうして、マァムに向き直った。
「マァム、気を付けないとだめでしょう。
　にいにがいてよかったわね。さ、お着換えしましょうね。」
　そう言って、レイラがマァムのワンピースを脱がそうとしたので、ヒュンケルは、またもや父の教えが頭をよぎり、慌てて二人に背を向けた。
　レイラは、マァムを着替えさせながら、ちらりとヒュンケルの背を盗み見た。
　彼の背中には、右肩から左腰まで、大きく袈裟懸けに刀傷の痕があった。
　レイラには、何の傷かはすぐに分かった。
　カール王都での出来事が頭をよぎり、レイラは痛ましい気持ちになったが、それを表情には出さなかった。
　マァムは、濡れたワンピースを脱いで、ヒュンケルのシャツを着せられたが、案の定、ぶかぶかで、シャツがワンピースのようになってしまっていた。
　レイラは苦笑した。
「ちょっと長いけど、逆にちょうどいいかもね。
　ほら、マァム、にいににお礼言ってらっしゃい。」
　マァムは、ヒュンケルに駆け寄ろうとしたが、自分の前で背を向けたままの彼の姿に足を止めた。
　気配を感じたヒュンケルが振り返ると、マァムが心配そうに、彼を見上げていた。
「・・・にいに、いたい？」
「え？」
　ヒュンケルは何のことかわからなかったが、マァムがあまりにも不安そうな、心配そうな顔をしているので、しゃがんでマァムに目線を合わせると、彼女の頭を撫でた。

「痛くない。大丈夫だよ。」
　彼がそう言うと、マァムは、ようやく、安心した様子で笑顔を見せた。
「さ、帰るか。」
　ヒュンケルは、立ち上がると、マァムに左手を差し伸べた。マァムはうれしそうに微笑んで、彼の手を握った。そのまま、歩いて村まで向かう。
　自分の左手をしっかりと握るマァムの小さな手の感触に、ヒュンケルは、マァムの手を引いているにもかかわらず、何故か、彼女に導かれているような錯覚を覚えた。

　アバンたちがネイル村に滞在を始めて１か月が過ぎた頃、村の子どもたちで対抗試合を行うことになった。
　ルールは簡単に設けられており、まず、使用する武器は、刃を削った鈍らの細身の剣。
村の広場には大きく四角が書かれ、そこが試合会場で、外に出されたら負けだった。
　また、けがをしないように、左手にバックラー、簡単な胸当てを身に着け、頭部への攻撃は禁止とされた。
　相手が「まいった。」などと言って、戦意喪失をするか、あるいは、場外で勝敗を決することとした。
　２０人くらいが参加した勝ち抜き戦で、最後に残ったのは、最年長の１２歳の大柄な少年と、８歳のヒュンケルだった。
　村の子どもたちは、ネイル村の子どもではないヒュンケルに対して、あからさまに対抗心をむき出しにした。
「やっちまえー！よそ者なんかに負けるなー！」
　口々に野次が飛んだ。
　ヒュンケルは、多少、いらついた表情を見せたが、アバンは、涼しい顔をしたまま、子どもたちの様子を目に映していた。
　アバンの隣には、マァムを膝に抱きかかえたロカが地面に座っていた。
　マァムは、村の子どもたちがヒュンケルに浴びせる言葉にムッとした様子で、ロカの膝から立ち上がると、大きな声で叫んだ。

「にいに、がんばれー！」
　不意に上がった応援の声に、ヒュンケルは、ちらりとマァムの方を見ると、わずかに口の端を上げた。
　マァムの声に、ほかの子どもたちもが非難の声を上げた。
「あー、マァム、よそ者なんか、応援するなよ！」
「ちがうもん！マァムのにいにだもん！！」
　マァムは、子ども特有のよくわからない理屈で対抗していた。
　審判を務める村の青年が声を上げた。
「はじめっ！」
　ヒュンケルと村の少年は、互いに剣を向けあったまま、お互いの間合いを図ろうとしていた。
　それぞれ、一歩、足を出し、また引く。そうして、互いの間合いに持ち込むタイミングを計る。
　だが、相手もそれをわかっているため、一歩踏み込もうとすると牽制に遭い、また一歩引く、を繰り返した。
　ヒュンケルは、アバンから、子ども相手には、大地斬と海波斬の使用は禁じられていた。通常の攻撃を仕掛けるしかなかった。
　ヒュンケルは、じっと相手を見据えた。
―向こうの方が、上背の分だけ間合いが長いな。ならば・・・。
　ヒュンケルは、姿勢を低くし、相手の懐に飛び込もうとした。
　だが、村の少年もここまで勝ち残ってきたのだ、そう簡単に懐に入らせてはくれなかった。ヒュンケルの腕めがけて、剣を勢い良く振り下ろした。
　ヒュンケルは、その一撃を左手のバックラーで受け止めた。重い一撃が腕に響き、姿勢を崩しそうになったが何とかこらえる。そのまま、剣ごと相手の身体を押し、素早く、右手の剣で相手の腹を薙ぎ払った。
　だが、ヒュンケルの動きを察した少年は、直ちに剣を下げると、その身を後ろに引いた。ヒュンケルの剣が少年の腹をかすめた。
―はずした・・・。
　ヒュンケルがそう思った次の瞬間、少年が猛然と突進してきた。ヒュンケルは急いで剣を構えなおし、相手の一撃を受け止める。
　重い。

衝撃が腕に走った。
少年は、ヒュンケルが苦しそうな顔をしたのを見逃さなかった。
続けざまに何度も剣を振り下ろす。
ヒュンケルは、それを自分の剣で受け止め続けた。
だが、彼よりも相手の少年の方が、体格もよく、背も高い。
その少年の一撃を受け止め続けることは、ヒュンケルの腕に疲労を蓄積させていった。一撃受け止めるたびに、踏み込みが深くなる。
—・・・まずい・・・。
ヒュンケルは焦った。
反撃の糸口をつかもうとして、強く、相手の剣を押し返した。その瞬間、ヒュンケルの姿勢が崩れ、前に右足が一歩出た。
村の少年は、その隙を見逃さなかった。
大きく一歩踏み込むと、ヒュンケルの左肩に向かって、思い切り強く、剣戟を叩き込んだ。
ごつん、と剣と骨が当たる音がした。
ヒュンケルは痛みに顔をしかめると、そのまま膝をついた。
それでもヒュンケルは剣を振り払って相手をけん制したが、すでに村の少年は、ヒュンケルの間合いの外に飛びずさっていた。空を切った剣を持つ右手が地面に付く。
「にいに！」
マァムが悲鳴を上げた。
「・・・これは、厳しいかな？」
マァムの隣で、ロカが、戦士の顔で試合の様子を見ている。
ヒュンケルは、立ち上がろうとしたが、それよりも相手の動きが速かった。
村の少年は、膝をついたヒュンケルの背に向かって、さらなる一撃を振り下ろした。今度こそ、よける間もなく、ヒュンケルはその一撃を受けて、地面に昏倒した。
全力を出したのだろう、村の少年の息も上がっていた。
村の少年は、ヒュンケルを見下ろしながら、荒い息を吐き、大声を上げた。
「こ、これでどうだっ！もう降参しろ！」

だが、ヒュンケルは、身じろぎもせず、何も言わなかった。
「アバン、止めさせた方がいいんじゃないか？」
　もしかしたら気を失ったかもしれないと思ったロカは、アバンに声をかけた。だが、アバンは、涼しい顔をしたまま、ヒュンケルに呼びかけた。
「ヒュンケル―。
　あなたの実力はこんなものじゃないでしょう。
　あなたまだ、私の言ったこと全部やってないですよね。
　言ったでしょう？負けるときは全力を尽くして負けなさいって。
　試合といえども、一緒です。
　力とスピード、それにもう一つ。戦士の武器が、あるはずですよ。」
　すると、地面に昏倒していたヒュンケルの手が、ぴくりと動いた。
　ヒュンケルは、砂で汚れた面を上げ、村の少年を強い目で見据えた。
　村の少年は、ヒュンケルの眼差しを受け、たじろいだ。
「お、お前、まだやるのか？」
　ヒュンケルは、立ち上がると、剣を構えた。
「・・・仕切り直しだ。構えろ。」
「いい加減に倒れろっ！！」
　村の少年は、先ほど同様に、猛然とヒュンケルに向かってきた。重い剣戟を次々に振り下ろす。ヒュンケルは、今度もまたそれを己の剣で、懸命に受け止めていた。
　ロカは、ヒュンケルの動きを注視していた。
　先ほどと同じような構図に見えるが、ヒュンケルの動作が少ない。まっすぐに相手を見据え、相手の剣の隙間から何かを見出そうとするような、強い眼差しを向けている。
　いつか、カールの騎士団でヒュンケルが見せた、相手を倒そうという強い意志を、ロカはその目に感じた。
　ロカは興味深げに、笑みを浮かべた。
　だが、マァムは気が気でなく、ロカに縋り付きながら、顔だけはヒュンケルの方に向けていた。

「にいに・・・。がんばれ・・・。」
　ヒュンケルは、相手の攻撃をひたすら受け止めながら、じっと、相手を見据えていた。不思議と、先ほどよりも冷静になり、己のうちに流れる気までもを感じることができた。
—一撃、一撃で十分だ。
　ヒュンケルは村の少年の攻撃を受け止め続けながら、次第に相手が焦りを見せてきたのを見逃さなかった。攻撃が雑になり、隙が生まれる。
　ヒュンケルは声を上げた。
「そこだぁっ！！」
　その瞬間、彼の剣に、一瞬だけ、光がさしたのを、アバンもロカも見逃さなかった。アバンが息をのむ。ロカが膝を乗り出し、腰を浮かせる。
「闘気・・・。」
　ロカがつぶやいた。
　少年が腕を振り上げた、そのわずかな隙を見逃さず、ヒュンケルは、まっすぐ前に向かって己の剣を突き出した。突き技の構えだ。そのまま体重を乗せて勢いよく踏み込む。
　重い一撃を腹に受け、村の少年は、背後に向かって吹き飛ばされた。
　どさりと、背中から倒れる。
　ヒュンケルは肩で息を吐いていたが、もはや、倒れた少年を見てはいなかった。ヒュンケルは、相手の少年が倒れた向こうにある、師の姿を見据えていた。ヒュンケルは、アバンに向かって剣を突き出した。
「これで・・・どうだっ！！」
　アバンは、口の端をわずかにあげ、眼鏡の奥の瞳に笑みを浮かべた。
「・・・グッドです。」
　その言葉に、ヒュンケルはにやりと笑った。
　そして、そのまま、安心したかのように、腰を下ろし、その場に倒れこんだ。
「・・・相打ち・・・。」

審判の青年がつぶやいた。

その日は雨が激しく降り注ぎ、外へ出ることはできなかった。
ヒュンケルは、つっかえ棒で支えられた窓蓋の隙間から、外を見た。つられて、バケルもヒュンケルの頭の上から外をのぞいた。
たたきつけるような雨足は衰える気配はなく、空も厚い雨雲で覆われたままだった。
だが、窓蓋を開けたままでも、庇のおかげで雨は室内まで吹き込む気配はなかった。ヒュンケルは、つっかえ棒をそのままにして、窓から離れた。
「今日はダメだな。やまないよ。」
その言葉に、子ども部屋の中にいたマァムが口を尖らせた。
「えー、つまんない。」
「しょうがないだろ。雨なんだから。」
「にいにー。」
「ダメだ。」
窓の外から差し込む光と、レイラが持ってきてくれたランプのおかげで、部屋の中は明るかった。
マァムは不満そうにしていたが、いくら言っても外では遊べそうにないことに気付いたようだ。マァムは、部屋の隅に行って、木箱の中をあさっていた。
しばらくすると、マァムは、満面の笑みを浮かべて、ヒュンケルに駆け寄った。
「にいに、よんで!」
マァムは両手で持った絵本を、ヒュンケルの前に突き出した。見ると、表紙には、きれいなお姫様の絵が描かれていた。
ヒュンケルは苦笑した。
「しょうがないな。ほら、座れよ。」
ヒュンケルは、マァムから絵本を受け取ると、自分が腰を下ろしている隣を示した。子ども部屋の床には、毛足の長いじゅうたんが敷かれており、ヒュンケルはそこに座っていた。
マァムは、ヒュンケルに絵本を渡すと、ヒュンケルの前に座り込んで、彼を見上げた。

「おひざ。」
「・・・わかったよ。」
　仕方なく、ヒュンケルは、マァムを膝の上にのせ、抱えるようにして、彼女の前に絵本を広げた。
　バケルは、ヒュンケルのすぐ後ろに降りてきて、絵本をのぞき込んだ。ヒュンケルとしては、二人に密着されて暑苦しかったが、文句は言わなかった。
　ヒュンケルは、１ページずつ絵本を声に出して読んでいった。マァムが持ってきた物語は、魔物にとらわれたお姫様を、騎士が救い出して結ばれるという、典型的な子供向け絵本だった。ヒュンケルとしては、まったく面白味のない物語ではあったのだが、マァムはそれをきらきらとした瞳で嬉しそうに見つめ、じっと、ヒュンケルが絵本を読む声を聴いていた。
「・・・魔物から助けられたお姫様は、騎士様と結婚しました。
　こうしてふたりは、いつまでも幸せに暮らしました。
　おしまい。」
　どこの昔話でも見かけるありきたりな言葉で終わった物語を読み上げ、ヒュンケルは絵本を閉じた。
　すると、マァムは直ちに声を上げた。
「にいに、もっかい。」
「は？」
「もっかい。」
　つまり、もう１回読めということか。
「モウイッカイー。」
　バケルも同じことを言った。
　ヒュンケルはため息を吐いたが、仕方なく、また１ページ目を開いて読み始めた。
　こうして３回は同じ物語を繰り返し読まされた。さすがのヒュンケルもここで音を上げた。
「今度こそ、おしまい。
　もういいだろう。他のことして遊ぼうな。な？」
　マァムに念を押すと、マァムは、始めは不満そうな顔をしたが、すぐに笑みを浮かべた。

「うん。」
　やっとマァムが膝から下りてくれた時には、ヒュンケルは、足がしびれていた。
　マァムは、テーブルの上に、絵本の最後のページを広げた。そこには、純白のドレスを着たお姫様に祝福の花びらが降り注ぐ、結婚式の場面が描かれていた。
「おひめしゃま、かわいいー。」
　すると、バケルが、ベッドの上から薄手の夏掛けを持ってきた。マァム用に小さく作られているそれは、夏の寝冷えを防止するための薄い綿布で、下から手を当てると、その手が見えるくらいの薄さだった。
　バケルは、それをふわりとマァムの髪に乗せた。
　マァムは左右の手で夏掛けの端をそれぞれ持つと、ベールよろしく、自分の頭に乗せた。
「バケル、ありがとー。おひめしゃまだー。」
　どうやら、マァムは絵本のお姫様ごっこをしようと思ったようだ。ヒュンケルは、マァムの無邪気な様子に顔をほころばせ、協力してやろうという気になった。
　ヒュンケルは、マァムが絵本を出してきた木箱から、色紙（いろがみ）とはさみを取り出した。この木箱は、マァムの宝箱だ。マァムの大切なものがたくさん入っていた。
「マァム、色紙もらうぞ。」
「はーい。」
　ヒュンケルは、いくつかの色紙を折ったり、切ったりして形を作っていった。マァムが彼の手元をのぞき込むと、色とりどりのいくつもの花や星ができあがっていた。マァムは目を見開いて喜んだ。
「わぁ、きれーい。にいに、しゅごいっ。」
　そうして、ヒュンケルは、出来上がった紙の花や星々を、マァムの夏掛け、いや、ベールの上にも乗せてやった。
「ほら、これでもっとお姫様だ。」
「うんっ！」
　マァムは、大きくうなずいた。

「マァム、カワイイー。」
　バケルもマァムを褒める。
　マァムがあまりに喜ぶので、ヒュンケルも嬉しくなった。もっと何かしてあげたい。
　ヒュンケルは、ふと考えて、今度は、色紙を小さく切り始めた。そして出来上がったものを、布巾で包んだ。
「バケル、これ持ってくれ。」
　そう言って、ヒュンケルは、その布巾の包みを、バケルに渡した。
「バケル、それ、せーので、上で開けてくれ。
　いいか？
　せーの。」
　ヒュンケルが声をかけると、バケルは、ふわりと布巾を広げた。
　すると、中からは、たくさんの色紙の小さなかけらが、まるで花びらのように二人の上に降りそそいだ。マァムは歓声を上げた。
「うっわぁっ・・・！」
　ヒュンケルは得意げに言った。
「どうだ、マァム、きれいだろう？」
　マァムは興奮した様子で、絵本の最後のページを指さした。
「にいに、これ、これ。」
「うん？ああ、結婚式な。」
　そのページのようだと言いたいのだろうと思い、ヒュンケルは何気なく口にした。
　彼の言葉に、マァムは何かを思いついたようだ。
「うんっ！マァム、およめしゃんー。」
　どうやら、お姫様ごっこからお嫁さんごっこになったらしい。マァムは、得意げに、ベールを模した夏掛けを頭にかけたまま、床に落ちた色紙のかけらを拾い上げ、それをまた宙に飛ばして、降りそそぐ花びらを作った。
　ヒュンケルが絨毯に腰を下ろし、穏やかな眼差しでマァムを眺めていると、バケルがひゅーっと下りてきた。
　バケルも、床に落ちた色紙を拾い集め、それを持って上に上がると、またマァムの上に色紙の雨を降らせた。マァムがきゃあきゃあ

と歓声を上げている。
「しゅごーい！およめしゃんだー。」
　すると、バケルがマァムの横に下りてきて尋ねた。
「マァム、ダレノ、ヨメ？」
　その言葉に、マァムはきょとんとした。
　絵本の最後のページを見ると、花嫁衣装を着たお姫様の隣には、正装の騎士が描かれている。なるほど、花嫁には、花婿が必要だ。
　マァムは、ヒュンケルに顔を向け、彼を見つめると、にっこりと微笑んだ。
「にいに！」
「は？」
「マァム、にいにのおよめしゃん！」
　ヒュンケルは、一瞬、何を言われているのかわからず、虚を突かれた。
　そして、数秒後に、マァムの言葉の意味を理解すると、慌ててマァムにとりなした。
「マァム、待て、待て。それはダメだ！」
「なんで？」
　マァムは、ヒュンケルが慌てている意味が分からず、首をかしげている。
「いやいやいや・・・女の子がそんなこと簡単に言っちゃダメだ！およめさんって、好きな人が相手じゃないとだめなんだぞ。」
「マァム、にいに、しゅき。」
「い、いや、ただの好きじゃないんだ。一番好きじゃないと。」
「マァム、にいに、いちばんしゅき。」
「・・・お前は何でも一番だろ。」
　いつかのレイラの言葉をヒュンケルはつぶやいた。
「だからな、およめさんってなったら、好きなだけじゃなくてな、その人とずっと一緒にいるってことなんだぞ。」
「ずっといっしょ？やったー。マァム、にいにといっしょがいいー。」
「い、いや、そうじゃなくてな・・・。」
　どう説明しても全くマァムに意図が伝わらず、ヒュンケルは頭を

抱えた。
　すると、マァムが、不安そうな目で、ヒュンケルを見つめていた。マァムは首をかしげて尋ねた。
「にいに、マァム、しゅき？」
　マァムの大きな瞳に見つめられ、ヒュンケルは、言葉に詰まった。好きか嫌いかと問われれば、それは。
「い、いや、そりゃ・・・好き・・・だけどさ・・・。」
「やったー。マァム、にいにのおよめしゃんー。」
「うわっ。」
　マァムは喜色をたたえてヒュンケルの首に飛びついた。腰を下ろしていたヒュンケルはそのまま後ろに倒れそうになった。
　マァムのあたたかく、柔らかい感触が伝わってくる。まっすぐに向けられる好意がくすぐったかったが、嫌ではなかった。
　マァムの温もりが、意地という名の鎧で覆った彼の心の内に、するりと入りこんできて、頑なな氷を溶かしてゆく。自分を慕ってくれる、この幼い少女に対する愛おしさがこみあげてきた。
　ヒュンケルは、自分に抱きついてきたマァムの頭を優しくなでた。
「わかった・・・わかったよ。」
　いつになく穏やかな彼の声に、マァムは腕を離して、彼を見上げた。ヒュンケルは、優しい眼差しのまま、マァムに笑顔を向けていた。
「わかった。マァムは、俺のおよめさんだ。俺が、マァムをおよめさんにする。」
　その言葉に、マァムは大きくうなずいた。
「うんっ！」
　ヒュンケルは、マァムに厳しく指摘した。
「ただし。」
　マァムは身構えた。
　ヒュンケルは、笑みを浮かべたまま、続けた。
「大きくなったら、だぞ。」
　彼の言葉に、マァムは再び大きくうなずいた。
「うんっ！」

マァムの歓声が子ども部屋に響いた。
　マァムは、再びヒュンケルに抱きつき、ヒュンケルを強く抱きしめた。ヒュンケルは慌て、バケルは口笛を吹いた。
「にいに、だーいしゅき！」
「こ、こらっ。」
「ヒューヒュー。」
　そのとき、ドアをノックする音が聞こえた。ヒュンケルは、慌ててマァムを自分から引き離した。
　すると、レイラが部屋に入ってきた。手にトレーを持っている。
「楽しそうね。声が聞こえてきたわ。」
　ヒュンケルは、どきりとした。今の会話を聞かれたのだろうか。
　だが、レイラはいつもと変わらない様子で、子どもたちに言葉をかけた。
「おやつ持ってきたわ。みんな、どうぞ。」
　レイラは、手に持っていたトレーを下し、その上の皿をテーブルに並べた。小さめの皿には、厚く焼いたクレープ生地が乗っていた。その上にはブラックベリーのジャムも乗っている。
「わーい。」
　マァムが皿を見て、嬉しそうな声を上げた。
「ワーイ。」
　バケルもくるりと宙返りをした。
　このとき、子ども部屋の中は、色紙の破片だらけで散らかっており、掃除をすることを考えると、思わず小言のひとつでも言いたくなるような光景だったのだが、レイラは文句を言わなかった。
　レイラは言葉をつづけた。
「この前みんながとってきてくれたブラックベリーのジャムよ。甘酸っぱくておいしいわよ。」
「あ、ありがとうございます。」
　ヒュンケルが礼を言うと、レイラは、ヒュンケルに向かって、いつもと同じ笑みを向けた。

　レイラがダイニングに戻ってくると、ダイニングでは、アバンとロカが、テーブルを囲んでいた。テーブルの上には、コーヒーの

入ったカップと、子どもたちに出したものと同じおやつが乗っていた。
　アバンは、戻ってきたレイラに声をかけた。
「あ、レイラ、いただいてます。このジャム、いいですね。デリシャスです。」
　レイラは、思い出し笑いのように、くすくすと笑みを浮かべていたので、アバンは不思議に思った。
「どうかしましたか、レイラ？ずいぶん楽しそうですね。」
　レイラは、アバンにうなずいた。
「アバン様、子どもの会話って、かわいいですね。」
「うん？あいつら、何か面白いことでも言ってたのか？」
　ロカの問いに、レイラはいたずらめいた笑みを浮かべた。
「ええ。
　マァムはね、ヒュンケルのお嫁さんになるんですって。」
　レイラの言葉に、ロカとアバンが同時に声を上げた。
「なんだとー！」
「おや。」
　アバンは笑みを浮かべて、レイラに応えた。
「それはかわいいですねえ。ヒュンケル、そんなこと言えるんですか。」
「逆よ、アバン様。マァムが説得したのよ。」
「・・・ということは、ヒュンケルも、いい、と？」
「そうなのー。かわいいでしょう？」
「ほほえましいですねえ。あの子、どんな顔して答えたんでしょうねえ。」
　レイラとアバンはにこにこと話しているが、ロカは怒り心頭だ。
「ふざけんな、あのガキ！俺のマァムになんてこと言いやがるんだ！！」
　気炎を上げるロカを、レイラとアバンが静止した。
「だからね、ロカ、マァムが言ったのよ。」
「ロカー、大人げないですよー。落ち着いてください。」
　だが、ロカはアバンに食って掛かった。
「落ち着いていられるか！マァムはな、俺のことを一番好きって

言ってたんだぞ！」
「マァムはなんにでも一番ってつけるでしょう？」
「俺は絶対に認めないぞ！あんなガキ！」
　その言葉に、今度はアバンが眼鏡の奥の目を光らせた。
「・・・それは聞き捨てならないですねえ、ロカ。ヒュンケルはいい子ですよ。」
　すると、ロカの怒りの矛先がアバンに向いたようだった。
「何だとぉ。
　マァムはな、かわいいだけじゃない。優しい子なんだ。この前だって、俺が腕ぶつけただけで、『とーたん、いたい？』『ホイミっ』って真似だけしてくれて・・・。
　天使なんだ！
　それを・・・それを・・・あんな坊主に嫁に出してたまるか！」
「言っておきますがね、ヒュンケルだって、立派なもんですよ。
　あの年で、私の海波斬までマスターして、読み書きだってばっちりですし、顔もかわいいでしょう？あの子は絶対、将来、びっくりするような美男子になりますよ。女の子が放っておくわけがありません。
　ロカ、そのときに後悔しても遅いですよ？」
「後悔するわけないだろ！
　マァムだってなあ、絶対に美人になる！今だってあんなにかわいいんだぞ！」
　途中から論点が明らかにずれており、もはや、アバンとロカのうちの子自慢になっていたが、レイラは止めなかった。

　アバンたちは、ネイル村に足かけ３か月の間、滞在した。
　だが、やがて、別れの日が訪れた。
　アバンは、長老やそのほか世話になった家々に挨拶をした後、ヒュンケル、バケルを連れて、村の出口に向かった。
　アバンの背には、この村に来た時と同じ、大きなリュックが背負われており、リュックの上にはテントがたたまれて乗せられていた。これからの野営に必要なものだった。ヒュンケルも、子どもにしては大ぶりなナップザックを肩にかけていた。もっとも、バケル

だけは身軽だった。
　ロカたち一家が、彼らを村の出口まで見送ってくれた。
「じゃあな、アバン。また来いよ。」
　ロカはそう言って、アバンに右手を差し出し、アバンもそれを握って応えた。
「ええ、必ず。」
　アバンも、うなずいた。こうして待っていてくれる人がいるということは、旅路にあっても心強いものだった。
「お気をつけて。」
「レイラ、お世話になりました。」
　アバンがそう言うと、ヒュンケルも二人に頭を下げた。バケルもちょこんと、頭を下げる。
「ありがとうございました。」
「マシタ。」
「いいえ。」
　レイラは、にっこりと微笑んだ。
　マァムは、レイラの足元でずっと泣きじゃくっていた。
「ほら、マァムも、先生とにいに、バケルにお別れ言わなきゃ。」
　だが、マァムは顔もあけずに、うつむいたまま、頭を横に振った。
　レイラは苦笑した。
「しょうがないわね。
　ごめんなさい、アバン様。お別れが寂しいらしくて。」
「いえいえ、しょうがないです。
　マァム、また来ますよ。それまでお元気で、ね。」
　アバンがマァムの頭をなでながら声をかけると、マァムはようやく頷いたが、やはり顔はあげなかった。
　そのまま、アバンたちは森に向かって歩き始めた。ここから森を通り抜け、港町に出て、船に乗るつもりだった。港町に出るまでは、何日かは野宿になる。
　ヒュンケルは歩きながら何度も振り返った。マァムはずっとうつむいたままだった。泣いているのだろう、時々、肩が上下して、レイラが何かマァムに話しかけていた。

ヒュンケルは、アバンとともに足を進めていたが、不意に立ち止まり、振り返った。
「どうしましたか、ヒュンケル？」
　アバンが声をかけた。だが、ヒュンケルは返事をしない。じっとネイル村の方を見つめ、何か考えている様子だった。
　やがて、ヒュンケルは意を決したようにナップザックを担ぎなおすと、一目散に元来た道を駆け戻った。
「マァム！」
　ヒュンケルは、マァムに駆け寄った。マァムの前にしゃがんで、彼女に目線を合わせた。マァムは、泣き顔のまま、顔を上げた。
「にいに・・・。」
　ヒュンケルは、マァムをまっすぐに見つめて、言葉をかけた。
「泣くなよ。
　俺、また遊びに来るから。お前のところ、戻ってくるから。
　約束しただろ？
　お前は、その・・・俺の、およめさん、なんだろ？」
　マァムは、彼の言葉に、大きくうなずいた。そうしてまた泣き始めると、マァムはヒュンケルに飛びついた。
「うわーん、にいにー。」
　マァムは、ヒュンケルの肩に腕を回し、抱きつきながら泣きじゃくっていた。だが、その涙の意味は、先ほどとは異なっていた。マァムは、懸命に言葉を紡いだ。
「まってる！ずっとまってる。
　マァムは、にいにのおよめさんだから！」
　ヒュンケルは、マァムの背に腕を回し、小さな体をそっと抱きしめた。そして、穏やかな声色で、マァムに呼びかけた。
「心配するな。すぐにまた来る。また、会えるから。」
「うん、うん。」
　マァムは何度もうなずいた。
　マァムは、しばらくの間、ヒュンケルに抱き着いたまま泣いていた。ヒュンケルは、そんなマァムをそのまま受け止めていた。
　やがて、マァムのしゃくりあげる音が少しずつ、小さくなっていった。

ヒュンケルは、マァムが泣き止んだことを確認すると、ようやくマァムの体を離した。そして、マァムの顔をのぞき込んだ。
　マァムの目は真っ赤で、涙がたまっていたが、ヒュンケルを見て、マァムはにっこりと笑みを浮かべた。ヒュンケルも、穏やかな笑顔をその面に浮かべて、マァムに微笑み、彼女の頭を軽くなでた。
　ヒュンケルは、ようやく立ち上がった。
　そして、今度は、ロカとレイラを見上げた。
　ヒュンケルは、二人に向かって、丁寧に頭を下げた。そして、二人に礼を言った。
「お世話になりました、レイラさん、ロカさん。」
　レイラは、ヒュンケルに笑顔を向け、うなずいた。
「気を付けてね。あなたがまた来てくれるのを、マァムと待っているわ。」
「はい。」
　だが、ロカは、苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。先ほど、マァムがヒュンケルに飛びついたときに、思わず、体が前に動いてしまったのだが、レイラに止められたのだった。それからずっと、ロカは渋い顔をしていた。
　ロカは、ヒュンケルに向かって声を張り上げた。
「言っておくけどなあ。」
　ヒュンケルはロカを見上げた。
「いいか、俺は、お前にマァムを嫁に出してやるつもりはこれっぽっちもないからな。そこんとこ、勘違いするなよ。」
　その言葉に、ヒュンケルではなくマァムが口を尖らせた。
「えー、とーたん。」
「マァムは黙ってろ。勝手にヘンな約束するな。」
　ロカは、見据えるようにヒュンケルを見下ろしていたが、やがて、言いにくそうに、言葉を紡いだ。
「けどな・・・お前は戦士だから・・・また来るっていうなら、今度は俺が鍛えてやる。
　覚悟しろよ。」
　ヒュンケルは、少し驚いた顔をした。だがすぐに、真剣な色をそ

の面に浮かべると、まっすぐにロカを見上げて答えた。
「はい。よろしくお願いします。」
　ロカは、ヒュンケルから視線を外したまま、ぶっきらぼうに最後の挨拶をした。
「じゃあな。
　・・・また来いよ、ヒュンケル。」
　その言葉に、ヒュンケルは、もう一度、丁寧にロカに向かって頭を下げた。
　いつの間にか、アバンがすぐ後ろまで来ていた。バケルもアバンの肩に乗っている。
「それじゃ、行きましょうかね。」
　再び、彼らは別れの挨拶を交わした。
　今度は、マァムは、笑顔で手を振った。
　アバンたちの姿が見えなくなるまで大きく、何度も。
「しぇんしぇー、にいにー、バケル—！またねー！！」
　彼らの姿が森の中へ消えようとした時、最後にヒュンケルが振り返った。そして、子どもらしく、勢い良く、大きく、その手を振った。

イラスト カヅキ様（https://www.pixiv.net/users/1688436）